
黒の双子の異世界演義

春寝 暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の双子の異世界演義

【Nコード】

N0103BA

【作者名】

春寝 暁

【あらすじ】

ある意味で最低、ある意味で最高の「正義の味方体質」を持つ幼馴染に巻き込まれた双子の兄妹が異世界を楽しみながら幼馴染を暗殺し、自らにかかりつつある死亡フラグを押し折る為の物語。 「レツッ！暗殺」「楽しそうだなあ」「お願いです！誰かこの魔王より真つ黒な人達止めて下さい！お願いします！」「見ないと目玉をほじくっちゃうぞ」「いやあ………はてさてどうなることやら 更新はきつと鈍亀です。気力が続く限り頑張って行こうと思います。」

第一話 黒の双子と召喚術式

第一話 黒の双子と召喚術式

ホスミ レイ
八月一日 湊と八月一日 九音は最凶だった。

実践担当の妹が九音。参謀担当の兄が湊。二人とも本当に仲がいい兄妹でご近所でも有名なのだが、その裏で「ご近所の評判を落とすことなく如何に敵を貶められるか」を日夜考え続けるという悪魔のような双子だった。

要するに腹「黒」いのだ。裏の通り名が「ブラック・ツインズ」と呼ばれるほどに。

というのにも訳がある。それは二人の大嫌いな幼馴染が原因だった。

イシザキ ソラ
石崎 空。二人曰く不本意ながらも幼馴染というカテゴリーに入る他人だ。

知り合ったのは中学二年生の時。すでにこの時、地元の不良グループの覇権を握る一歩手前まで来ていた二人と最悪な一人の出会い。地元不良グループの最後の砦を攻めに行く時だった。

目の前に立ち塞がった生徒会長の空と対峙したあの日。嫌々ながらも縁ができてしまった。

彼の中では二人は不良グループを更生させようと働きかける正義の味方だという認識で通っている。

違うと言っているのに人の話を聞かず、ただ真っ直ぐに突っ走る真正銘の「正義の味方」体質&性質人間と関わりを持ったせいでその尻拭いがこちらに回ってくる回ってくる。

最初はこの辺の不良だけを占めるつもりだったのにいつの間にかハーレム体質が生んだドロドロの女性関係の始末やら、逆恨みが原因で襲ってくる奴等の相手をした。それにより一度は命を懸けた危ない橋を渡ってからは、大嫌いの部類に入った。

そんな事件以来、大喧嘩の末縁を切ったはずの空が何をトチ狂ったかもう一度会って話が見たい。喧嘩したままは嫌だという事で仕方なく…本当に仕方なく初めてであった廃屋に足を踏み入れた時。

「お待ちしておりました！ 勇者様…が三人！？」

正体不明の光に包まれ、in異世界。

以心伝心するまでもなく、二人の心はすぐに重なった。

「いいえ。違います。」

勇者様はこの空^{バカ}だけで俺（僕）達は何の力も持たない平々凡々なゴロツキでございます。

ですので、この空^{バカ}を徹底的にこき使って惨たらしく殺してくださいませ
「さい巫女様」

「そ、そんな恐ろしい事を笑顔で言わないで下さい！ 打ち合わせでもしてたんですか！？」

一糸乱れぬ嘘偽りのない本心だった。

異世界「エリュシオン」。

様々な種族が分かれている大大陸ヴェイルトを中心に四つの大陸があるという。

人々は平和に暮らしていたのだが、ある日「魔王」とやらが降臨して人の住む大地は大変な事になってしまいました。

私達じゃ太刀打ちできません。どうかお願いします異国の勇者様。この国をお救い下さい。

とまあそんな感じの内容だった。

説明された場所は王がいる謁見の間。多分巫女っぽかったので巫女と呼んだ少女は大神官アーミア・リヴィウッドというらしい。かなり長めの説明をしたが要約すればこんなものだ。

しかし、王様も周りの態度も最悪だった。王様は踏ん返り返ったまま、周りの官僚奴等も品定めをするような目で見てくる。ハッキリ言って人に物を頼む態度ではない。

第一印象がいい奴にも碌なのがないが悪い奴はもっといないだろう。答えは決まっている。

「お受けいたします」

「「やなことだ。空一人にやらせるよ」「」

気まずい沈黙が流れた後、他の席から「なんと無礼な」という声が聞こえる。

何が無礼というのだろう。呼び出したのにこの仕打ちというのはあんまりではないかとあからさまな不満の表情を見せると、王様は感慨深そうに長いヒゲを触りながら言った。

「……本当に打ち合わせでもしたかのようにピッタリじゃ。」

異世界には相手を写す使い魔でも飼っているのか？どちらが使い魔じゃ？」

「双子ですよ。使い魔とか意味わかりません。頭のお医者様が必要なお歳なのでは？」

「いやいや。必要ないって澗。すでに手遅れな頭を治療したところで金と時間とお医者さんの労働の無駄だと思っぞ」

「ちよっ！ 王様の前で失礼だろ！ お前ら、状況わかってる！？」

わかっている。わかっているからこういう態度を取っている。

双子の目的は廃屋に行く前からもう決まっっていて、今がそれを期す重要すぎるチャンスなのだから。

「バックアップも報酬の有無もその後どうしてくれるかもわからな
いでバカみたいに厄介事を背負い込む空^{バカ}よりは状況はわかっている
つもりですよ？」

「……空って書いてバカって読むの止めるよ。地味に傷つく」

「見返りが欲しいというのか？勇者のクセに……」

懇切丁寧に攻撃する。澗の話術の基本だった。

それに上長するように九音が話を載せる。もっと周りの奴等の怒りを掻き立てる為に。

「ホラ。言動からして使い捨てるつもり満々じゃねえか。」

空^{バカ}にわかるように説明すると……勇者様お願いします。魔王倒して

きてください。

ですが、私達は何もしません。お金も食料も武器も仲間集めも自分達で何とかして下さい。

私達は応援しています。でも、魔王を倒してもビター門も払いません。

元の世界に返せるかどうかわかりません。

なので、ずっとこの国にいてください。必要なときはまた呼び出して再利用します。

さあ！頑張つてこの世界の為に働いて扱き使われて華々しく散つて下さい。

その後、華々しい嘘物語りくらいは残してあげてもいいけどすぐに忘れます。有難うございました。勇者様。

つていう義理も人情もないこの国ご都合主義な頼み事にどうして僕達が協力しないといけないんだ？」

「なっ！……無礼な！」

「貴方は？」

怒り心頭で出てきた細身の年寄り。

怒りで顔が真っ赤になっっているが着ている服はそこそこ良いものだ。それなりの地位についている役人だというのはすぐにわかった。

「この国の宰相 ヴァン・ファルセット！ 世界の危機にお心を悼めておられる国王様に対して何という暴言を！！」

「そ、そうだぞ。謝つとけよ。さすがに言いすぎだ」

「では、貴方は何をしてくれるのでしょうか？ ちゃんと俺達を帰してくれる保障は？」

必要な資金手当てや衣食住の手配は？ この世界に関しての知識や魔王についての情報は？

保障も手当てもないのに引き受けるなんて九音の言う通りになる可能性だってあります。

だから貴方はバカなんですよ。自分が正義の味方体質だからって俺達を巻き込まないでくれませんか？」

その口調はとても冷めていて空に対して、否、ここにいる全員に対して攻撃的だった。

周りの空気が一々二度下がったような感覚が支配する。

にっこり笑っているが遷の目は笑っていないし、九音もいつでも抜け出せるように臨戦状態を保っている。

きつと目の前でポカンとしているバカにはわかっていないだろうが。

そんな空気の中、弱弱しく発現したのは神官美少女アーミアだった。

「か、帰します。その為の魔法陣もちゃんとあります。

ですが…それを発動させるのも容易ではなく…巫女や神官が王都の結界を維持しながら発動させるのは不可能なんです」

「っ！ ほら！ 魔王って奴を倒せば結界の必要もなくなって帰れる！ そうだろう？」

「嘘でしょ？ ソレ。目が泳いでいますよ。神官とやらは嘘をつくことが得意ではないようですね。

本当は帰る術式とやらはないのでしょうか？ 全く勇者殿につき合わされるとろくな事がないです」

「はっ…」

「止めるよ！ 可哀想だろ！ それにいつか帰れるかもしれない！

見つかるかもしれない！

その為にも魔王とやらをやっつけたら大丈夫だって！ だから一緒に行くこう！」

凶星なのか泣きそうな表情のアーシアの前に空は立って言った。お人好しもここまでくればバカとしか言いようがない。

コレの大丈夫に付き合っつて、死に掛けたのをもう忘れていたとは。漣の表情が変わり、無表情になる。その目は絶対零度の眼差しだった。

対して空はこの絶対零度の眼差しが苦手だった。

漣が本気で怒った時は表情がなくなる。無表情なのだが、瞳の奥に燃えている怒りの炎はちよつとやそつとじゃ消えてくれない。

まさに蛇に睨まれた蛙状態で謁見の間で固まっていた空に助け舟を出したのは一人の騎士っぽい人物だった。

「いやはや。その精神や見事。弱い者を率先して護ろうとするとは勇者の鏡ですな」

「は、はあ……」

「貴方は？」

「私はヴァルナ Heim 国、騎士団長。シャツハ・トーテツシモという。」

貴殿の名はレイ殿でよろしかったか？ 妹…もしくは姉君がそのよくな名前で呼んでいたのだから」

「申し送れました。自己紹介がまだでしたね。異国の勇者に巻き込まれたゴロツキ！

異世界「地球」の極東の島国「日本」の出身。八月一日漣と申します。

この世界では名前の方が先ならばレイ・ホズミとなります。それ

と妹の…」

「八月一日九音。こつちじゃクオン・ホズミになるのかな？ ゴロツキ2だよ」

「レイ殿、クオン殿。お二人のご慧眼。中々のモノでございました。確かにそれでは誰だつて不満を持ちましょう。我々として勇者様の巻き添えとはいえ無関係のお二人を呼び出してしまった。

予想外の事故とはいえこちらの不手際。

どうでしょう？ 報酬などの話はまたの機会という事にしてもらい数日はこの城に留まり、世界の事を知ってもらおうというのは」

不躰で申し訳ないのですが…。と騎士団長の言葉に宰相も王様も頷いた。

「うむ。それがよいだろう。勇者様とホズミ殿。そして、その妹君を部屋まで案内しろ」

今日はこれで終わりのようだ。

双子は顔を見合わせて機嫌を良くし、ニッコリ笑って喜んでと言った。

二人で一つの個室。ケチだなあと思いながらも二人は各々に行動を始めた。

監視カメラや盗聴器などの類が見つかるとは思われないが持ち前の勘

で余計な物や不審な物がなければのチェック。

その後カーテンを閉めて真つ暗にし、室内を誰にもわからないようにしながら「装備」を確認した。

何とか持って来る事に成功した拳銃類と刀やナイフ。どれもちゃんと使える一級品である。

どうやってコレを入手したのかは、両親のツテという範囲に納めておこう。

「にしても…案外うまくいそうでよかつたね。漣」

「そうですね。これならあのバカは自然に死んでくれますよ」

嬉々として念入りに装備を点検する。

少し時間が経ってどうやら不具合はないようだった。

術式というのはよくわからないが、魔法の一種なのだろう。

RPGなどでは定番だ。どんなものがあるのかは予想すらできない。

なので、再びカーテンを開けて扉を少し開く。

扉の前には二人の見張り。逃がすつもりは毛頭もないらしいと苦笑しながら九音は頼み事を「英語」で喋ってみた。

「すみません。お水を一つもらえますか？」

「あ、え？…す、すみません。レディ。我々の国の言葉で話していただけますか？」

「ああ。すみません。つい母国語が出てきてしまいました。お水を頂きたいのですが…」

「わかりました。すぐにお持ちするので待っていて下さい」

「有難うございます。騎士さん」

「いえ！そんなにおきになさらず！」

ちよつとネコを被って扉を閉めれば、兵士達からヒソヒソ声が聞こえる。

『あの子可愛かったな！勇者様ご一行の従者様なのか？』

『いや。あの神官の手違いで呼び出されたらしい。巻き込まれた一般人だという話だが…』

『マジ！？じゃあ…ずっと城にいてくれたら俺らにもチャンスがあるかも？』

『バカ。そんなチャンス一切ねえーよ』

「プツ…バアーカ」

クスクス笑いながら、優しく微笑む溼に英語で会話し始めた。

この国の人々は見た目は英語圏の人のだが、英語がわからないようだ。

盗聴をされていたとしても、母国語で喋っているのだと言えばいい。帰国子女なんて日本では珍しくもないのだから。

「さて。これからどうしようか？」

「地図が欲しいところですね。どこへ行くにも指し示す物があったら便利ですし」

「となると方位磁石とか…それ以前にこの国の文字の勉強とかしなないと苦労しそつだね」

「当面の問題は旅行資金と地図の購入。この世界の文化レベルとかかな」

「魔法みたいなのもあるんだつたら見てみたい！ぜひ！」

「それは俺も賛成。便利なのがあつたらどんどん利用しちゃおうね」
「そうだね！やっぱゲームみたいにドカーンって派手な奴とか…」
「いいですねえ。ファンタジー。ついでに暗殺用の魔法とかも調べ
ちやったりします？」
「賛成！」

今までの事は全部英語で喋っている。学校などで習うものではなく本場の本格的なものだ。

両親の仕事の都合上日本人よりも外国人を相手にする事の方が多い二人にとってはこのくらいの事は朝飯前である。

第二話 黒の双子と情報収集

第二話 黒の双子と情報収集

溼 side

初代勇者が建国したと言われているヴェルヘルミナ国は、人間の国の中で最も栄えている。

ヴェルヘルミナ国以外に大きな湖がある虹の国「ビーフレフト」。大樹が育つ森に囲まれた国「ファウード」が人間が住み収める大陸の北側。

東にはエルフと呼ばれる精霊術に長けた術者達が暮らしている。その国の名を「アルフェイム」という。

また精霊術とは相容れない魔装具を扱う錬金術を使う者をダークエルフという。

彼らは闇が深い森に住む。その国の名を「スヴァルト Heim」という。

西にはドワーフが住む一つの国がある。

その名を「ニタヴァリエール」。鉾山で武器や防具を作る国である。

南は魔族の土地。勇者以外進める者はおらず瘴気に包まれたおぞましい場所。

勇者以外見た事がない国の名は「ミツスガルド」であるといわれている。

王城図書館 国の成り立ちより抜粋

「こんなので本当にいいの？」

「ええ。構いません。今のでかなり言葉がわかりました」

「ホント？ どうしてわかるの？ それが異世界の人の能力だから？」

「いいえ。貴方が文字を呼んでいる速度と単語ごとに開いている空白を見ながら単語を置き換えていただけですよ。」

基本がわかれば読む事は簡単ですね。助かりました。司書長様。お忙しい中すみません」

見張りに頼んで王城の図書館へと案内してもらった漣はその司書長「レイヤ・カートリッジ」に本を読んでもらっていた。

小さい子供に国の事を教える為に使う教科書だが、文字を覚えるには調度よく頭にはすぐに入った。

王族が作った図書館には見張りと漣とレイヤ以外は誰もいない。というのも作った方がいいが誰も利用しに来ないのでレイヤは暇をしていたのだ。

漣はこの図書館に来た初めての利用者だった。

「スゴいわ。そんな事ができるなんて……」

「どんな国の文字でも説明を聞いてすぐに動けるようになって両親に訓練を受けていたんです」

「ご両親は何をしていらっしやっただの？」

「父は……うーん……こちらの言葉でいう傭兵や護衛のような仕事をしていました。」

母は戦争カメラマン……戦争の悲惨さを世間に訴える為に戦争の様子を写実して、一般人に見せるという活動をしています」

「かめらまんというのはわからないけれど……素敵なお両親ね」

「初めて出会った時は御互い戦場で、母は自衛の為に武器を持って、父は敵だと思って武器を持って一戦交えたのが出会いらしいです」

「まあ！ そうでしたのね！ どちらが勝利なさったの？」

「母です。母は刀という剣と写実道具だけで戦場を歩き回る人ですから」

「なんて遅いお人なの！ 私ファンになってしまいそうですわ！」

「見ます？ 写真ありますよ」

澪は携帯を開くとフォルダから母の写真を取り出した。

しばらく子育ての為に休業していたが、子供の頃から厳しく双子を鍛え上げた後にまた旅立ち戻ってきては展覧会などを開いている。

日本のラストサムライとまで言われるほどの剣術の持ち主で、刀片手に戦場でカメラを取る姿に惚れる者は数知れず。

けれど、テレビなどには絶対に出演せずにただ戦争はやってはいけないものだ。というのを伝える為だけに歩き回っている。

この写真を撮ったのは春休み。双子の誕生日に戻ってきた時のものだった。

「これはどうなんているの？ 小さな箱の中に人がっ！」

「これは携帯電話と呼ばれる俺達の世界の道具です。この画面に映っているのが母ですよ」

「お若いわね。おいくつ？」

「今年で36くらいですかね」

「……随分苦勞なさったのではないですか？」

「母は遅すぎる人でしたし、父もそれなりに収入もありましたしそれほど苦勞はしていませんよ。」

ただ週に一度、両親に恨みを持つ輩がやってきては撃退というのを繰り返しています」

「それを苦勞って言っていていいと思いますよ！？」

ある日、刺客が舞い込んできた日には母が撃退したのだが「これでは安心して昼寝もできない。二人とも今日から特訓ね」という一言から人生がちよっと変わった。

週一の襲撃だつて並大抵の人には負けなくなったところで、これが普通なのかと思ひ友達に自慢げに話したときは今みたいな反応をされたものだ。

懐かしいなあ。新鮮だなあと漣は少し嬉しそうに微笑んだ。

「もう貴方が勇者をやればいいのではなくて？」

「いいえ。俺には勤まりませんよ。そんなメンド…じゃない。立派な役目なんて」

「今堂々と面倒つて言うつもりでしたわね。さすが王様の前で大きな啖呵を切つただけありますね」

「いいえ。当然の事を要求したまです。俺達の目的は別にありますから」

「それは…」

「言えません。次の本をお願いしてもいいですか？」

「もう。ケチですね」

膨れるレイヤに苦笑しながらも、レイヤの聞き取りやすい朗読を漣は聞き漏らすことなく受け入れる事にした。

もう一人の見張りを連れて九音は場内を探索していた。

場内の見取り図を頭に叩き込む為だ。いつどんな時にどうやってここから脱出するか。

緊急時の人の案内は罠の可能性もある。逃げるなら自身が信じたルートが一番。

建物の周りを歩き回り、見渡していく。どの部屋に何があるのかというのを見極める。

その途中で、アレに出会わなければもつとよかったのに。

「あつ。九音」

「……何だ。空か^{バカ}」

「バカって言うなよ。あのさ……さっきの件なんだけど」

「断ると言ったら断る。僕は行かない。行くなら一人で行って是非とも野垂れ死んでくれ」

勇者様こと石崎空。見張りが思わず緊張しているのを感じる。

こんな奴に何を緊張する事があるというのかわからないと九音は溜息をついた。

「用がないなら僕は行く」

「ま、待って」

「迷惑。邪魔。見張り。勇者殿を部屋までお送りしてくれる?」

「……わかりました。勇者様。こちらへ」

「あつ!ちよつと……九音!」

煩い奴を追っ払いついでに見張りもなくなったところで九音は神殿の方に向かった。

自分たちが呼び出された神殿には見張りも誰もない代わりに嚴重に鍵がかけられていた。

それを難なくピッキングツールでこじ開けて中に入った九音は神殿の様子を全て携帯のカメラに収めた。

水にぬれても大丈夫で象が乗っても壊れない人類史上最も丈夫な携帯は父の自慢の作品だ。

もちろん衛星が飛んでいない為、ずっと圏外で連絡は取れないが無線機としての役割も持てる優れ物。

まさか異世界で役に立つとは思わなかったが。

最後に自分たちが転送されてきた魔法陣を写す。これは写真だけではなく動画も一緒に。

何かの役に立つかもしれないという判断だ。魔法とやらには詳しくないが、詳しい人がいれば話を聞けるかもしれない。

そんな事を思いながら一通りカメラを回し終わり、それをポケットに仕舞った後振り向いた先にいる男に言った。

「何のようかな？ 騎士団長殿」

「いやはや。お気づきになられましたか？」

「到着したのはついさっきでしょ？」

「まあ偶然ですよ。全く見張りの兵士は何をやっているのやら」

「彼に勇者様を任せてきたんだ。叱らないでやって」

「では仕方ありませんな。見学は済みましたか？」

「まだ半分も周っていない」

「ご自身の目で周りの状況を掴もうとするのは結構ですが……そろそろお戻りになってくれませんか？」

「嫌だ。食事ならいらぬし、僕は貴方たちに用事はない」

「そんな事言わずにお帰りいただけませんか？」

「嫌だ。戻りたい時に戻るから、君は職務に戻っていい」

「お供します」

「素直に見張りと言ったらどうだ？」

「では見張りの為、同行するのを許可願えますか？」

「いいよ」

ちよつと憎たらしくて、確実に腹に一物抱えていそうなタイプだが現時点では悪い奴ではないだろうと同行を許可した。

所変わって兵士の食堂。シャツハと九音はご飯を食べていた。

九音はハヤシライスもどき。シャツハはラーメンもどきを食べているが周りの視線が若干痛い。

「食事はしないのでは？」

「ここの食事は目の前で調理してるから大丈夫だと思って」

「……貴方方は本当に賢いですね。勇者やったらどうです？お似合いですよ」

「嫌だ」

「何故です？失礼ですがソラ様には戦闘センスのかけらもなく、警戒する事すら知らない。」

王家はソラ様を押し付けてらっしゃいますが、私は貴方の方が何倍も向いておられると思います」

「そら。僕と溲は家の事情で修羅場をくぐってるからそれなりに実力はあるよ。でもね。」

いくらお金を積み重ねようが、元の世界に返してくれるという確約があるのが絶対に嫌」

「そこまで断る理由は何故です？」

「……騎士団長さんには我俣に付き合ってくれたから一つだけかなりいい事教えてあげる。」

これから言う事は誰に広めてもいいけど絶対に忘れちゃダメだ。さもなければ命がない」

「……ちよっと時間をもらっていいですか？」

「どーぞ」

本気だということがわかってもらえたのだろう。

残っていたラーメンもどきを平らげて、心を集中させてからよしっと一息ついた。

それを合図に九音はシャツ八に言った。

「謁見の間とやらで溲がチラつと言ったと思うけど……アイツは正義の味方体質なの」

「正義の味方体質？あれはソラ様の性格を現した比喻表現ではないのですか？」

「違う」

「では……どういふものなのですか？」

「またの名を主人公体質とも言っただけど……騎士団長様は御伽噺は読んだ事ある？」

昔を思い出しているのかシャツ八は少し笑った。

物語の主人公。そんなものに憧れていた時期があるのは異世界でも変わらないらしい。

「子供の頃は勇者の物語が大好きでしたよ」

「その物語の登場する勇者は「絶対に」死なない。周りの誰が死んでも主人公は死なない。」

正義の味方はどんな犠牲を払っても必ず悪を倒す。そうしないと物語は生きない」

「そうですね。そうでなくては物語は成立しません。けれど、その言い方ですとソラ様が何かの物語の主人公のように聞こえます」

「そうだ。この物語はアイツの人生っていう物語なんだ。だからアイツに関わった者は多かれ少なかれ命のやりとりを経験するが、あいつだけは「絶対」に「死なない」んだ」

食堂の中が冷たく凍った。

それはある意味最高の勇者体質だろう。あの体質は勇者をやるためだけに生まれてきたようなものだ。

アイツが生きている限り、アイツの物語は終わらない。どんな逆境も乗り越えていくだろう。たとえ友人の屍が転がろうとも目的を果たすだろう。

その意味に空は気付いていない。空は信念を貫くだけだ。目の前の正義に向かって愚直に真っ直ぐにバカみたいに走る。

後ろを振り返らずに、転がった屍を見ないで進む。それがどれだけ恐ろしい事か。

「それは……どういう……」

「意外に頭悪いんだな。例えば魔族とやらが攻めてきてアイツが最前線。君の部隊は？」

「大体50人くらいでしょうか？」

「それなりに優秀なんだろうね。性格良い奴悪い奴はこの際どうでもいいけど……」

そこに突然の奇襲。大規模魔法的なものがあるのかはわからない

けどそんな感じで確実に51人全員が死亡する規模の攻撃があったとする。

さて……そんな状況下でアレは生き残る事ができると思う？」

「無理なのではないのですか？」

「アイツは生き残るよ。アイツの「為」に誰かが「盾」になるから「っ！」

「わかる？それでアイツは攻撃した魔族達を滅ぼすよ。だってアイツにとっての「仲間」を殺されたわけだから。

でも……そこには誰も生き残っちゃいない。アイツ以外誰も生き残っちゃいない。

君も含めて50人死んだ大地の上でアイツは打ちひしがれる。

その光景に同情した誰かが言う。

「これは仕方がなかった。事故だったんだよ。貴方は悪くない……っつてな」

「……そういう……事ですか」

「一般大衆はみんな勇者様に味方をする。性質が悪いだろう？」

被害者側は何も言えずに泣き寝入り。働き手を失った家族が路頭に迷うのも知らない」

今までにもあった。アレの無謀に付き合わされて酷い目にあった人々がいた。

けれど、世論が邪魔をした。英雄と呼ばれたアイツを中傷すれば確実に非難にあった。

当然。うちのその一人。なのにアレの周りにはいつも人が絶えない。

「貴方にもそういう体験が？」

「あつたよ。あの時は大変でさ…。世論が味方してるってのにうちの両親ったらアイツを殺すってマジで武器取り出して止めるの苦労したし」

「……………すみません。失礼な事を聞きました」

「いや。だから気をつけといて。ヤバイと思ったらアンタは自分の事だけ考えて」

だから…死なないで欲しい。何考えてるかはわからないけどアレのせいで誰かが死なないで欲しい。

今はそれを願うだけしかできなかった。

部屋に戻った二人は御互いの情報を交換した。

透は、司書長の融通のおかげで地図を用意してもらつ手はずがついた事と文字を覚える事ができた。

九音は、城の見取り図と魔法陣の写真。それからシャツハに冒険者ギルドというのを紹介してもらった。

「ギルド？」

「どんな身分も関係なく冒険者を登録できるんだって。

そこでクエストをやってお金を稼ぐ。命がけの時もあるけど暮らしていくには十分すぎるくらいもらえる場合もあるって」

「推奨みたいなのを書いてくれたんですか？」

「ううん。場所だけ。城下にあるけど…あそこは目に付きやすいから馬車に乗って離れた所のギルドに行つて偽名を使って登録すれば

大丈夫だって」

「なるほど。読めるようにはなりましたが…書くのは練習が必要ですね」

「偽名は何にする？」

「うーん。変な名前つけて貴族とかと被ったら嫌ですね。明日、図書館に行って調べてみます」

「よろしく」

「よろしくされました。では寝ましょう。明日も早起きさせられるんですから」

「うん」

二人はランプの火を消して眠りに付いた。
異世界に来て長い一日目が終了した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0103ba/>

黒の双子の異世界演義

2011年12月31日04時46分発行